

第三章 弥生時代

第一節 弥生時代の概要

弥生時代は、水田稲作と金属器が大陸から波及し、狩猟採集を^{せい}業の基本としていた縄文時代の生活様式が根本から変わった時代である。水田稲作は、耕作に必要な水を確保するために灌漑^{かんがい}を必要とする。また、田植えから刈り入れまで半年以上の期間を要するため、村々での協同と米の蓄えが必要となる。そのほか、水田稲作は食糧としての米の獲得とともにその調理方法も変化させた。水田稲作地の造営は、村の景観にも大きな変化を及ぼした。また生活では、新たに波及した青銅器を用いた非日常的な場であるまつりが始まる（写真3-1）。

九州北部へ水田稲作が伝来したことが、弥生時代の始まりとされる。水田稲作は、北海道と南西諸島を除く日本列島に波及して、各地の弥生文化の開始を促すのであるが、日本海沿岸に沿って東北北部へいち早く波及する。太平洋沿岸では、伊勢湾沿岸までは比較的早い広がりを示すが、そこから東側にはなかなか進まない。食糧生産への依存がまだ薄く、狩猟採集社会が継続しているなど、弥生文化を受け容れる側の生活様式の違いが大きく反映されるためである（森岡 二〇〇四）。水田稲作による食糧生産は、共同体社会を段階的に発展させ、階層社会の形成を促した。

鉄器と青銅器は、水田稲作とともに伝来した文化である。

鉄器は、九州地方を中心に鉄製工具などに一定の分布を見せ、弥生時代後期になってから九州以外の地域でその広がりが明らかにな

る。つまり、鉄器が日本列島に広がり、農耕具の創出や工具の変化が起こったものと考えられる。しかし、実際に鉄器の使用が一定の割合を示すのは、弥生時代後期になってからのことである。弥生時代中期には、石包丁・磨製石斧・石鎌・石鏃^{せきぞく}・石槍などの石製品（石器）が盛んに作られるが、後期になると石器の発見例は限定的となる。この段階に鉄器化が具体的に進んだことを表すのである（禰宜 田 一九九八）。つまり、鉄器の広がりは、水田稲作の波及とは連動していないことになる。

青銅器は、実用品としての鉄器に対して祭器としての性格が強く、弥生時代を通して祭祀^{さいし}に関わる儀器化を進行させる。銅剣・銅矛・銅戈^{どうか}と銅鐸^{どうたく}による祭祀儀礼を志向する集団は、西日本でそれぞれの分布範囲を形成し、弥生時代の青銅器文化を特徴づけている（岡内 一九八九）。しかし、近年これらの青銅器が共伴して出土する事例が増え、境界の曖昧性と相互の交流の様子が明らかになりつつある。東海西部以西では、銅鐸の大型化と加飾化が進むとともに銅鐸祭祀が執り行われ、西日本と東日本を画する地域社会の大きな違いを示す要因の一つとなっている（鈴木 二〇〇二）。

弥生時代の墓の代表は、方形周溝墓^{ほうけいしゅうこうぼ}と呼ばれる四角く墳丘を築き、周囲に溝を巡らせる墳墓である。墳丘上に遺体を埋葬する施設を作るもので、弥生前期の近畿地方で出現し、水田稲作の波及に同調して東日本へ広がりを見せる。それは、水田稲作の始まりによる階層

社会を反映させており、弥生社会を代表する墓となる。

集落には、竪穴建物、掘立柱建物が見られる。竪穴建物は、火処とした炉がその中央付近に作られるが、その構造は縄文時代から基本的に変わらない。掘立柱建物は、土中に埋めた柱を利用して板敷の高床を作るもので、その多くは食糧を備蓄する倉庫として使われた。竪穴建物、掘立柱建物など機能の違いが明らかかな建物で構成される集落では、溝で村を取り囲む環濠集落と呼ばれる弥生時代特有の集落を成立させる。環濠集落は、農業生産物を納める倉庫となる掘立柱建物があることから分かるように、農耕社会の成立と照合する。環濠集落は稲作の広がりと同様に、九州から西日本、関東へと広がる。村を区画する環濠集落は、墓域以外の一般生活に必要な施設を集約させる。首長の居住域に関わるものさえもそこに築かれていく。

東日本では、水田稲作を基盤とする農耕社会の成立により、方形周溝墓、環濠集落が波及するようになる。



写真 3-1 復元された弥生集落（静岡市立登呂博物館提供）

第二節 静岡県内の弥生時代

弥生時代は、土器型式などの違いから、天竜川を境に東海地域を東西に分けて捉えられる（鈴木 一九八七）。顕著な例は、弥生時代後期の土器型式に見ることができ、東海西部となる西遠江に伊場式・欠山式土器が広がり、東部に菊川式・登呂式・飯田式・雌鹿塚式土器が広がる。それは、第一節で示した銅鐸文化圏の東限とも重なるもので、列島を太平洋沿岸で東西に区分する境ともなっていた。

静岡県内の水田による稲作の痕跡は、渋沢式段階（215ページ）でははっきりしない。嶺田式段階になってから、有東遺跡（静岡市駿河区）や西通北遺跡（沼津市）などの沖積平野部における遺跡の進出が明らかになる。静岡平野においては、本格的な水田稲作の開始がうかがえる（岡村ほか 二〇一八）。

方形周溝墓は、同じ嶺田式段階から確認される。東駿河では、上原遺跡（沼津市）での発見が最も古い例となる。弥生時代中期後半の有東式段階になると、全長二〇mを超える極めて大型の方形周溝墓が、寺尾原遺跡（函南町、写真3-12）や中原遺跡（沼津市）で見つかっており、階層社会の実態をよく表すようになっていく。

環濠集落は、弥生時代中期の事例が東海西部の西遠江で見られるものの東遠江から北伊豆にかけてははっきりしない。その中で西通北遺跡では、嶺田式段階の大規模な環濠が発見されている。天城連山を境として伊豆を分けた、伊豆半島東岸から南伊豆にかけての地域では、日暮遺跡（伊東市）・日詰遺跡（南伊豆町）において有東式並行段階の環濠が築かれる（表3-11）。静岡県内では、先行して環濠が取り入れられる地域となるが、関連する土器型式は、関東地域に分布する宮ノ台式土器との親和性がうかがわれるものとなっ

ている。

弥生時代後期に入ると、いずれの地域においても環濠集落がその数を増やし、それぞれの拠点的地域形成が図られるようになる。日詰遺跡や梶子遺跡（浜松市中央区）のように弥生時代中期と後期の二つの時期に場所を違えて環濠が築かれる集落と、集落が移動して新たな場所に築かれる場合とがあるが、後者の事例が多い。

弥生時代に環濠を取り入れなかった西駿河や、中期には少なく後期になって出現する東駿河から北伊豆の地域など、積極的な採用が進まなかった地域の動向からも分かるように、県内で環濠集落が最も盛んな段階は、弥生時代後期前半となる。そして、後半には、そのすべてが廃絶していく（写真3-13）。

弥生文化の波及としては、弥生時代中期前半に丘陵や山間地での開発が行われるが、大型の打製石斧などの使用や再葬による土器棺墓の採用など縄文時代からの生活様式が継続する（石川一九九九）。中期中葉に当たる嶺田式段階になると、地域的な偏在はあるものの沖積平野における開発が進み、水田稲作の始まりと方形周溝墓の採用が明らかになる。この段階で環濠集落は、西遠江において登場する。

静岡県における本来の弥生社会の開始は、この段階に求められることになる。弥生文化の波及は九州を起点として東進するが、それは、各地域で一律ではない段階的な動きとして捉えられるのである。静岡県内での本来の稲作の伝播による弥生文化の受容としては、渋沢式段階（丸子式段階）から嶺田式段階の間が実質的な画期となっている。



写真 3-3 伊場遺跡の環濠（浜松市博物館提供）



写真 3-2 寺尾原遺跡の方形周溝墓（函南町教育委員会提供）

No.	遺跡名	所在	立地	遺構名	時期	備考
1	荘館山遺跡	藤枝市原	丘陵	1A号溝・1B号溝	弥生後期	後期Ⅰ後半の竪穴住居と重複 2つの溝の重複
2	寺家前遺跡	藤枝市中ノ合	丘陵	SR6400	雌鹿塚Ⅲ	環濠？ 自然流路 木製農耕具、銅釧
3	駿府城内遺跡	静岡市葵区城内町	沖積地	区画溝	弥生後期	環濠？
4	午王堂山Ⅱ遺跡	静岡市清水区庵原町	丘陵	U字溝	弥生後期	
5	午王堂山Ⅲ遺跡	静岡市清水区庵原町	丘陵	SD01	雌鹿塚Ⅲ	午王堂山3号墳隣接、午王堂山Ⅰ遺跡からの連続？
6	上嶺遺跡	静岡市清水区袖師町	丘陵	1号溝	有東（新）	環濠？ 神明山1号墳隣接
7	月の輪上遺跡	富士宮市星山	丘陵	溝状遺構 20 溝状遺構 01	雌鹿塚Ⅲ	隣接して雌鹿塚Ⅲ～Ⅳの集落
8	泉遺跡	富士宮市泉町	扇状地	溝状遺構（SD01）	雌鹿塚Ⅲ	
9	丸ヶ谷戸遺跡	富士宮市大岩	丘陵	SD1	雌鹿塚Ⅲ	後期前半の竪穴住居と重複
10	滝戸遺跡	富士宮市黒田	丘陵	SB1・SB2	雌鹿塚Ⅱ	近接する竪穴の土器と接合
11	丸崎遺跡	富士市南松野	丘陵	溝状遺構	雌鹿塚Ⅲ	
12	宮添遺跡	富士市増川	丘陵	SD1・SD2	雌鹿塚Ⅱ	多重環濠
13	西通北遺跡	沼津市大諏訪	沖積地	環濠 大型溝状遺構	嶺田併行	溝断面箱型・覆土中に有東式土器
14	三芳町遺跡	沼津市三芳町	沖積地	溝遺構（SD1）	雌鹿塚Ⅲ	
15	御幸町遺跡	沼津市御幸町	沖積地	SD-1	雌鹿塚Ⅲ	西日本系の壺
16	尾崎遺跡	沼津市西沢田	沖積地	環濠状遺構	雌鹿塚Ⅱ	後期後半の竪穴住居と重複
17	植出遺跡	沼津市足高尾上	丘陵	SD401	—	環状の溝
18	目黒身遺跡	沼津市西椎路	丘陵	第1排水溝	雌鹿塚Ⅱ	
19	向原遺跡	函南町柏谷	丘陵	溝状遺構	有東（新）	環濠？
20	寺尾原遺跡	函南町柏谷	丘陵	第5地点 SD01 第7地点 SDR01	雌鹿塚Ⅲ	第5地点で後期の環濠 第7地点中期土器出土
21	神崎遺跡	伊豆の国市神崎	丘陵	第1溝	雌鹿塚Ⅱ	後期後半の方形周溝墓と重複
22	日詰遺跡	南伊豆町下賀茂日詰	沖積地	1号環濠 2号環濠 3号環濠 4号環濠	有東（新） 雌鹿塚Ⅲ 有東（新） 雌鹿塚Ⅲ	弥生中期・後期の多重環濠
23	日暮遺跡	伊東市桜木町	丘陵	環濠	有東（中）	

表 3-1 駿河・伊豆の環濠集落 原則西の遺跡から順に示す。

第三節 弥生時代の終焉

弥生時代後期を雌鹿塚式土器が製作・使用された時期として捉え、古墳時代前期を大廓式土器が製作・使用された時期とする。大廓式土器は、土器型式の変化により四段階に分け、その変遷が辿れるものである。その中で、大廓Ⅲ式期は、広域的な土器編年の並行関係から布留0式期（寺沢 一九八六）と同時期であるとしている。布留0式期は、箸墓古墳（奈良県桜井市）出土土器の段階であり、古墳時代前期中葉に相当する（春成・小林ほか 二〇一一）。駿河においても高尾山古墳（沼津市）の主体部の年代であり、箸墓古墳と相似墳となる神明山1号墳（静岡市清水区）の出土土器の年代が同時期と考えられる。換言すれば大廓Ⅰ式期・大廓Ⅱ式期はそれ以前の段階となるのである。

大廓Ⅰ式期は、列島規模で興った土器の広域的な移動をもって設定しており、各地に土器の波及が認められ、土器様式が大きく変わっていく段階としている（安城市歴史博物館 二〇一四）。その代表例が丸ヶ谷戸遺跡である。丸ヶ谷戸遺跡では、土器ばかりか前方後方形を示す墳墓が登場しており、それまでとは異なる集団の存在が浮き彫りになっている。そこには物の移動だけでなく、人々の移動が関連していることは明らかであり、在地の集団との融合が図られたことが指摘される。

広域的な集団の移動が始まった背景には、容易に物が移動できる環境と、敵対関係か友好関係かは別としても、国家間の国として対外関係が明白になったことが上げられる。魏志倭人伝によると、その中で倭国大乱と呼ばれる内乱状態となり、諸国からの人々の流出がはつきりと現れることになる（表3-12）。倭国における邪馬台国の女王卑弥呼の共立は、西暦一八八ごろとされ、このことは国

の起こりがはつきりし、支配者の出現を象徴する出来事とされる。大廓Ⅰ式期の始まりをこの頃と考える。土器様式の変化は、生活そのものの変化につながり、初源的な古墳と考えられる墳墓の登場は、時代が大きく変わったことを表している。箸墓古墳を筆頭とする大型墳墓の築造は、卑弥呼の数十年にわたる階層制社会を表象する国の運営を経て達成された結果としての大規模なモニュメントとなるのである。

西暦	出来事	中国	
57	倭奴国王、後漢に入貢、光武帝より金印紫綬を賜る	ごかん 後漢 (25 ~ 220)	
107	倭面土国王帥升、後漢に入貢、安帝へ生口160人を献じ、謁見を請う		
146 ~ 189	桓・霊帝の間、倭国大乱		
184	黄巾の乱、後漢崩壊へ		
188	このころ、卑弥呼立つ		
204	公孫康、楽浪郡の南に帯方郡を分立		
208	赤壁の戦い		
220	後漢滅亡		
238	魏、公孫氏を滅ぼす		ぎ 魏 (220 ~ 265)
239	邪馬台国、卑弥呼、魏に大夫難升米と次使都市牛利を送る、親魏倭王金印、銅鏡100枚などを賜る		
240	帯方太守、梯儁らに詔書、印綬を持たせて倭へ派遣		
243	卑弥呼、再び魏に大夫伊聲耆、掖邪狗らを派遣	こ 呉 (222 ~ 280)	
245	帯方郡より黄幢（黄色い旗さし）を下賜		
247	卑弥呼、帯方郡へ載斯烏越らを使者として派遣、狗奴国の戦いについて報告、張政らを倭国に派遣		
248	このころ卑弥呼死す、径百余歩の塚、男王立つが服せず、宗女台与立つ		
	台与、魏へ帰任する張政に掖邪狗ら20人を同行させる。		
265	西晋成立	せいしん 西晋 (265 ~ 316)	
266	倭女王（台与カ）西晋に使いを送る		
280	西晋、呉を併合し天下統一		
	このころ、陳寿が「魏志倭人伝」をまとめる		
291	八王の乱		

表 3-2 中国の歴史書にみられる倭国の年表（2～3世紀）

第四節 富士宮市の弥生時代中期

渋沢遺跡

淀師地区に広がる湧水地を見下ろす丘陵にある渋沢遺跡は、富士宮市域での弥生時代の開始を告げる代表的な遺跡である。遺跡は富士山の新时期富士の溶岩流（外神溶岩）が形成した丘陵の縁辺にある市立富丘小学校周辺に位置する（高田ほか 二〇一六）。発掘調査では、「土器棺墓」と呼ばれる墓が見つかっており、墓域が築かれ、静岡県内で良好な事例のないこの時代を特徴付けるものとなっている（写真3-4～7）。調査では、墓に利用されていた甕や壺などが出土している。

遺跡の年代は、三段階に変遷しており、弥生時代前期後半から中期の前葉に相当する。段階三に相当する土器に付着した煤の分析によると、その年代は紀元前三九〇年～四一五年を示している。段階三とする丸子式土器の段階は、渋沢遺跡が最も優勢になる時期である。弥生時代中期の始まりにおいて、静岡県東部地域の基準となるもので、静岡県中部以西を主たる分布範囲とする丸子式土器とは、甕類において少し異なる形態を示している。土器の形から渋沢遺跡の人々と、富士川の上流域から長野県にかけて生活していた人々との交流がうかがえる。このように渋沢遺跡の土器は、近接する丸子式土器と親和性は強いものの、異なった形のものが含まれ、それぞれの地域の特徴を示す土器を組み合わせる事で成立している。土器づくりの粘土は、色や形に関係なく、羽鮒地区周辺の富士川流域で採集されたものとされ、ほかの地域から持ち込まれたものではなく、いろいろな集団の相互の交流によって渋沢遺跡で作られていたものであった。

渋沢遺跡の終焉後、西通北遺跡（沼津市）や有東遺跡（静岡市駿



写真 3-6 渋沢遺跡土器棺墓



写真 3-4 渋沢遺跡土器棺墓



写真 3-7 渋沢遺跡土器棺墓



写真 3-4 渋沢遺跡土器棺墓

河区)が代表となる弥生時代中期葉へ時代は移り変わる。東海東部において、この時代から水田稲作に対する比重を重くする農耕社会が形成され、環濠集落が登場し、墓としての方形周溝墓が採用されるようになる。この時代になると、山間地に広がる富士宮では遺跡が確認されなくなる。

遺跡のある場所

富士山西南麓での原始・古代の遺跡は、古富士火山の泥流層を基盤とする範囲にその多くが分布する。それに関わらないのが、本格的な富士山信仰の始まる中世以降とこの渋沢遺跡の段階と言える。現状で、渋沢遺跡と同じ時代の遺跡としては、押出遺跡・下谷戸遺跡・別所遺跡が確認されているが、別所遺跡以外は新期富士の溶岩流を基盤とする丘陵上に位置している。渋沢遺跡・下谷戸遺跡は、富士山の伏流水が湧き出す湧水地の周辺に広がる。水場としての利便性は確保された立地ではあるが、一定の広さを有する水田耕作地をここに求めることは難しい。下谷戸遺跡は、縄文時代の遺跡分布と共通しており、沖積地がほとんど認められない立地景観にある。この立地から渋沢遺跡での生業は、水田稲作ではなく縄文時代以来の狩猟採集が主体だったと考えられる。同じ時代の遺跡は、富士山西南麓から北麓、さらに群馬県の山間地など関東平野縁辺へ広がりを見せており、この地域に弥生時代の水田稲作への依存が弱い遺跡の分布があったことが指摘されるものとなっている。

渋沢遺跡の人々の暮らしを支えていた生業とは、どのようなものであったのだろうか。具体的な生産に関わる遺構の発見は見られないが、遺跡の立地や出土した遺物から想定することができる。土器の器面に残る種実の痕跡から栽培植物を特定するレプリカ法によって、渋沢遺跡ではコメ・アワ・キビが確認される。一段階は、キビ・

アワのみで構成され、二段階からコメが加わる。ただし、構成比としてのコメは、一五%に満たない数値でしかなく、キビの比率が高い(遠藤 二〇一二)。畑作への依存が高い状態は、遺跡の最終段階まで続く。農耕に直接関わる石器の構成を見ても、縄文時代晩期の清水天王山遺跡(静岡市清水区)と大きな違いはない。土掘り具となる大型の打製石斧や特徴的な横刃型石器などの出土に表れている(図3-1)。

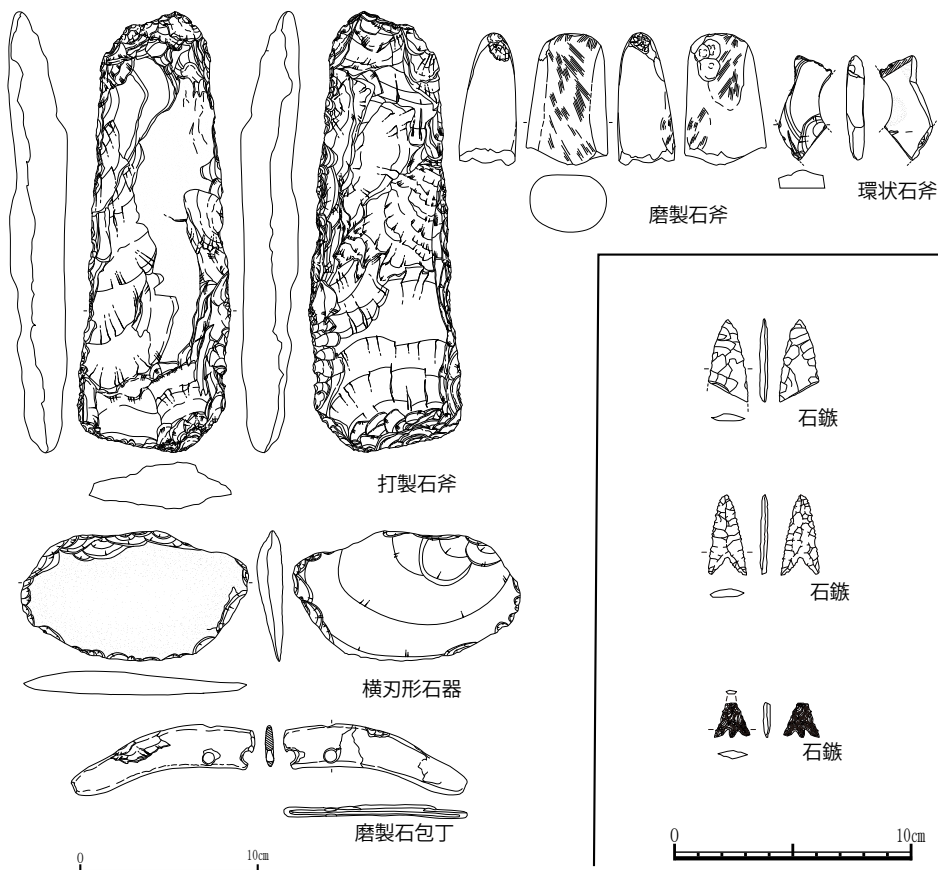


図 3-1 渋沢遺跡石器図

第五節 富士宮市の弥生時代後期

時代のフロンティア

弥生時代後期になると、富士宮でも潤井川の中流域に拠点的な集落である、周囲を濠で取り囲んだ弥生時代を代表する環濠集落が築かれる。その先駆けとなる滝戸遺跡では、丘陵の縁辺で環濠とともに雌鹿塚Ⅱ式期の土器が出土している。丸ヶ谷戸遺跡（写真3-8）や泉遺跡（写真3-9）、月の輪上遺跡などで、雌鹿塚Ⅲ式期までには環濠集落が築かれ、弥生時代後期前半段階における一大拠点を形成する。水田稲作が主要な生業となっていた弥生時代中期の遺跡がない富士山西南麓において、これらの遺跡は後期に突然登場した遺跡であり、環濠集落がその当初から築かれていたことを表すことになる。富士地域においてこの頃の遺跡分布を見ると、富士山と愛鷹山の間を流れる赤沢川流域と富士川下流域を含めたこの地域に限定的な広がりを見せるが、いずれも弥生時代の遺跡分布と異なる点で共通しており、時代のフロンティアとしての開発が始まる。

富士宮市のある駿河湾東岸地域では、弥生時代中期から後期へ移り変わる大きな時代の画期に環濠集落が築かれ出す。丸ヶ谷戸遺跡や尾崎遺跡（沼津市）などでは、在来の土器以外に西遠江系の土器の出土が見られ、新たな弥生時代集落の造営に西遠江の勢力が関与した可能性がうかがえるものとなっている。雌鹿塚Ⅰ式期～Ⅱ式期の竪穴建物の中に、弥生時代後期の在地の形態である小判形以外の隅丸方形のものが含まれる点は、それをよく表している。また、前段階の弥生時代中期に大井川以东から狩野川流域に展開した有東式土器を使う人々は、環濠集落を築かない。

雌鹿塚Ⅰ式期に登場する遺跡としては、滝戸遺跡、富士市の平椎遺跡・宮添遺跡などが取り上げられるが、丘陵から山間地への進出



写真 3-8 丸ヶ谷戸遺跡環濠

は、水田稲作に対する依存度の低下と、生業の多様性をさらに明らかにする。環濠についても、その立地から溝を巡らせるものの防御に関わる機能は極めて希薄であると言える。それぞれの環濠を作る溝は、集落を区画することを目的としており、溝で囲まれた範囲で大型住居や貯蔵施設としての倉庫などの機能分化した諸施設による空間を構成する。

新たな集落展開

環濠集落は、雌鹿塚Ⅲ式期で終焉を迎え継続しない。集落を取り囲む溝もその役割を終える。そして、この段階以降、富士宮でも新たな集落造営の動きが明らかになる。その典型が黒田の月の輪上遺跡である。

月の輪上遺跡では、竪穴建物二軒・掘立柱建物七棟・小型竪穴建物六棟などが見つかっている(図3-2、写真3-10・11)。多彩な遺構の組み合わせであり、小型竪穴建物においては、炉がなぐ住まいとして使われていない。竪穴建物四〜五軒に対して、小型竪穴建物、二間×一間の掘立柱建物がそれぞれ一棟の組み合わせにあることがうかがわれる。これらが、村に住む人々が日常の協同作業を行う上での一つの単位となり、食糧生産における収穫物を共同の倉庫(掘立柱建物)に納めている組織を「共同体における構成単位」(近藤 一九五九)とすると、竪穴建物・小型竪穴建物・掘立柱建物による単位集団により村が経営されていたことが指摘される。少なくとも月の輪上遺跡では、五つの集団が認められる。そこに大きな階層差を表わす遺構・遺物は見当たらず、均質的である。前段階の環濠集落において階層性に関わるものは、その中で構築されていたものと考ええると、首長クラスの居住域は、単独的に営まれていたことになり、豪族(首長)居館やそれが管理する倉庫などが別の場



写真 3-9 泉遺跡環濠

所にあった可能性がある。

雌鹿塚Ⅲ式期以降に新たな展開を迎えるものとして、滝戸遺跡でも同じ丘陵上での集落の継続が取り上げられる。しかし、沖積地にある泉遺跡では、環濠集落終焉後に集落遺跡は造営されていない。それが再興されるのは古墳時代を待たなければならない。雌鹿塚Ⅳ式期以降環濠集落が終焉を迎え、環濠の外側に集落域を広げるようになる段階で、これらの環濠集落以外に小泉の石敷遺跡や大中里の坂下遺跡など周辺へ集落が築かれその広がりが増える。その中には、柚野辻遺跡や現在の田貫湖湖底を中心に広がる長者ヶ原遺

跡など山間地で狩猟採集を主たる生業とする遺跡などもある。弥生時代における生業の多様性を背景とした精力的な山間地開発が進むようになる。長者ヶ原遺跡は、本来富士山の湧水地の周辺に広がっていた集落遺跡であり、標高六六〇mを測る高地にある。田貫湖のある台地は、田貫湖の岩屑なだれ堆積物を基盤とする。二万年程前に富士山が西側に崩れた際に生じた大量の土砂が天子山地にぶつかり、行く手を遮られ厚く堆積したことにより形成されたもので、富士山山腹の複雑で起伏に富んだ地形環境のなかにある。長者ヶ原遺跡では、二軒の竪穴建物と集落の縁辺にあったものと思われる狩猟用の落とし穴が見つかっている（写真3-12・13）。

このように雌鹿塚Ⅲ式期は、環濠集落の終焉など時代の画期に関わる出来事が多くなる。この段階、沖積平野にあった弥生時代の集落のほとんどは、消失して確認できなくなる。弥生時代後期の中核的な集落である登呂遺跡（静岡市駿河区）や伊場遺跡（浜松市中央区）さらに山木遺跡（伊豆の国市）なども動向がはっきりしなくなる。この時代の太平洋沿岸における大規模な自然災害が、その画期にあったことを想定させるものとなっている。対して、長者ヶ原遺跡のような山間地への進出が活発化し、山間地、丘陵での急激な遺跡増加が促される。沖積平野における遺跡の終焉を契機とした人口圧の受け皿となっていたのであろう。その代表例が沼津市の足高尾上遺跡群であり、愛鷹山中腹の二km四方の範囲に一〇〇〇軒を超える竪穴建物が密集する。

雌鹿塚Ⅲ式期では、方形周溝墓が群構成を示す墓域として明らかになる。滝戸遺跡では、同じ丘陵上で方形周溝墓群が集落域の北側で展開する。月の輪上遺跡と星山谷を挟んで対岸の坊地南遺跡で複数の溝が確認されており、月の輪上遺跡に対する墓域となっていた可能性がある。富士山側の丘陵上では、富士宮溶岩流を地質的な基



写真 3-10 月の輪上遺跡 58号住居出土遺物

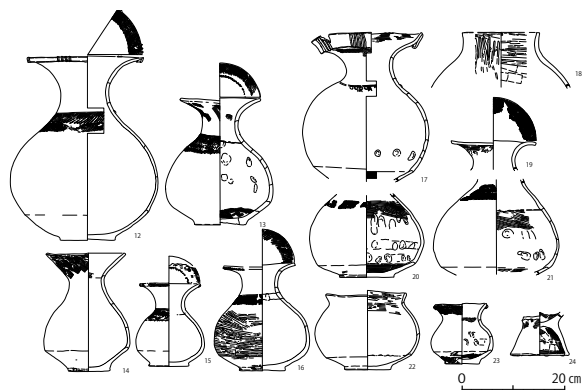


図 3-3 月の輪上遺跡 58号住居出土遺物

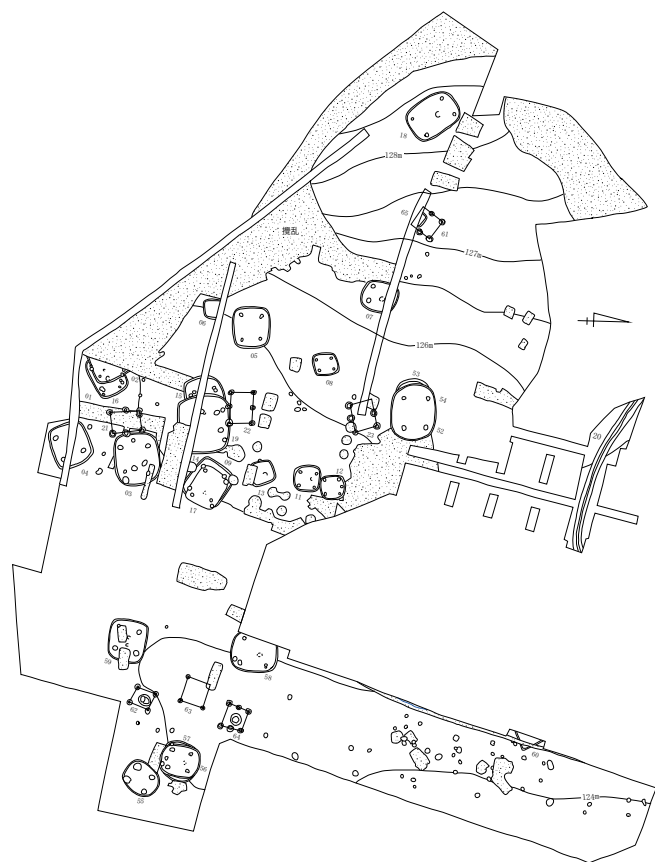


図 3-2 月の輪上遺跡遺構全体図

盤とする城山遺跡で雌鹿塚Ⅱ式期～Ⅲ式期の方形周溝墓群が見つ
かっている。溝が途切れることなく全周するもので占められる。そ
の中でSZ1とされる雌鹿塚Ⅱ式期の方形周溝墓は、最も広いところ
で幅九・二五mを測る大型のものとなっている。関連する集落遺
跡ははっきりしていないが、現在市街地となっている富士宮溶岩流
が形成した丘陵裾を東西に広がる微高地に点在する遺跡の一部が関
連する。連雀町遺跡などでその段階の遺物が採集されており、その
可能性が考えられる。

富士山西南麓で弥生時代後期の遺跡の分布は、これまで述べた潤
井川中流域と富士川下流域に当たる富士市松野地区が相当する。そ
れぞれは、月の輪遺跡群のある星山谷を介して結び付くのである
が、いずれも主体となるのは、弥生時代後期中葉に当たる雌鹿塚Ⅲ
式期以降の環濠に関わらない段階である。潤井川流域において、弥
生時代後期後半の滝戸遺跡の方形周溝墓群と古墳時代前期前半の南
部谷戸遺跡の方形周溝墓では、その規模は元より連接する前者と単
独の后者でその構成も大きく異なる。墓域の形態差による画期のあ
ることが指摘されるのである。富士市の中野遺跡の第一方形周溝墓
は、雌鹿塚Ⅲ式期段階の方形周溝墓で、溝内の埋葬施設からガラス
勾玉、ガラス小玉の出土が見られる。滝戸遺跡のように一つの溝を
共有して周溝墓が群を成して築くものではなく、相互に溝を共有せ
ずに独立したものが群構成を示し、ほかと隔絶している様子がうか
がえる。それが地域における階層社会を反映させているとすれば、
環濠集落の終焉以降、丸ヶ谷戸遺跡における墳墓登場までの間、新
たな集落の構築とともに、そこに古墳時代へと続く構造的な階層社
会の萌芽期としての複雑な地域社会が形成されていく。



写真 3-12 長者ヶ原遺跡落とし穴



写真 3-11 月の輪上遺跡 58号住居出土遺物



写真 3-13 長者ヶ原遺跡住居

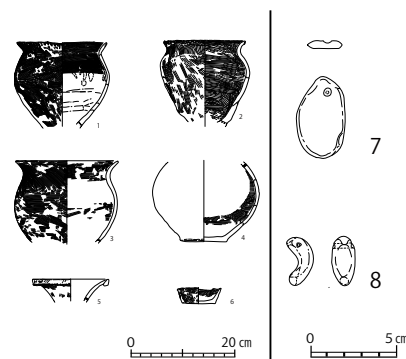


図 3-4 月の輪上遺跡 53号住居出土状況